

熊本県立第二高等学校（管理機関：熊本県教育委員会）【4期3年目】の中間評価結果について

1 中間評価の結果

これまでの努力を継続することによって、研究開発のねらいの達成が可能と判断される。

2 中間評価における主な講評

① 研究計画の進捗と管理体制、成果の分析に関する評価

【研究開発のねらいの実現にあたり、評価項目の内容が十分達成されており、特に程度が高い】

- ・SSH部と授業開発部が中心となって研究開発を展開し、全教員が探究型授業に取り組むことを目標とするなど、学校全体として研究計画を推進する体制となっており、大変評価できる。
- ・生徒・保護者アンケート、二高ICEモデルを活用した評価、卒業生追跡調査等で生徒の変容や成果をきめ細かく分析しているほか、成果が定量的なデータで示されており、大変評価できる。

② 教育内容等に関する評価

【研究開発のねらいの実現にあたり、評価項目の内容が十分達成されている】

- ・理数科で実施してきた探究活動の成果を生かし、4期目は美術科、普通科でも課題研究に取り組む教科「探究」を設定するなど、見直しや改善を図りながら理数系教育に重点を置いた教育カリキュラムを構築しており、評価できる。
- ・二高ICEモデルによる評価手法を確立し、探究活動における生徒の資質・能力の成長の可視化に取り組んでいる。各教科・科目の授業でもこのモデルを応用して指導と評価の一体化を図るなど、意欲的な取組が展開されており、評価できる。
- ・開発した「見せどころ設計マニュアル」をもとに、各教員が「授業改善のための工夫の見せどころシート」を作成し、探究型授業を学校全体で実践している点は評価できる。

③ 指導体制等に関する評価

【研究開発のねらいの実現にあたり、評価項目の内容が十分達成されている】

- ・9割以上の教員が課題研究の指導に関わるなど、全校的な指導体制となっており、評価できる。
- ・週時程に組み込まれた教科会でのICE・ID研修会の日常的な実施、年4回の拡大研修会（二高ism）の実施、全職員と県内外の教育関係者が参加する授業研究会の開催、他校視察など、教員の指導力向上に向けた取組を組織的かつ積極的に実施

しており評価できる。

④ 外部連携・国際性・部活動等の取組に関する評価

【研究開発のねらいの実現にあたり、評価項目の内容の達成がやや不十分であり、一部改善を要する】

- ・理数科に加え美術科や普通科においても、大学・企業・研究機関等と連携して先進的な理数系教育や探究活動に取り組んでおり、評価できる。今後は崇城大学と連携して、高大接続の改善に資する研究を発展させていく予定であり、成果が期待される。
- ・物理、化学、生物、地学の4つの科学系部活動は、多くの生徒が積極的に理数系コンテスト等に参加するなど充実した活動状況であり、評価できる。更に高いレベルでの活動も視野に入れ、今後も生徒の意欲や主体性を高めていくことが望まれる。

⑤ 成果の普及等に関する評価

【研究開発のねらいの実現にあたり、評価項目の内容が十分達成されている】

- ・3学科が協働した成果発表会の開催、学校ホームページの充実と開発した教材等の公開、各メディアを通じた情報発信、熊本県スーパーハイスクール指定校合同研究発表会等の主管校として他校を牽引するなど、積極的に研究成果の発信・普及に取り組んでおり、評価できる。研究開発実施報告書も大変分かりやすく整理されており、評価できる。

⑥ 管理機関の取組と管理体制に関する評価

【研究開発のねらいの実現にあたり、評価項目の内容の達成がやや不十分であり、一部改善を要する】

- ・KSH（熊本スーパーハイスクール）推進事業の実施や理系ALTの配置、設備整備費の重点配分、県内SSH校担当者会の実施、合同研究発表会の開催などを通じて指定校を支援しており、評価できる。県として各指定校に求める役割や位置付けを明確化し、特色に応じた適切な支援を引き続き行っていくことが望まれる。
- ・熊本県教育委員会のホームページでKSH及びSSH指定校を紹介しているほか、県内の研修会等で指定校の研究成果に関する情報を発信しており、評価できる。熊本県立第二高校が4期にわたって培ってきた成果をどのように県全体に広げていくのか、戦略の更なる具体化が望まれる。